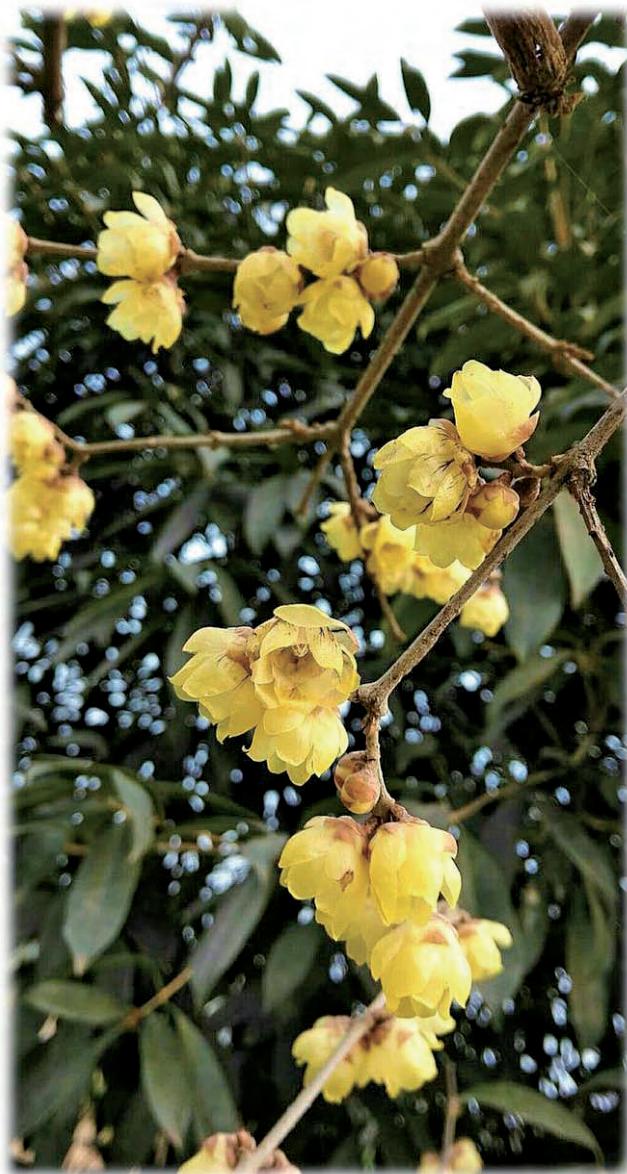


静岡県日中友好協議会

NEWS LETTER

No.129
2022.12



【特 集】

静岡県・浙江省友好提携 40 周年記念事業

- ・友好提携 40 周年記念式典
- ・高齢者介護福祉交流に関する意向書締結
- ・唐詩の道中日芸術家作品特別展
- ・静岡県・浙江省ビジネス交流会

交流往来・都市間交流

- ～富士宮市と紹興市友好都市提携 25 周年～
- China ビジネス「日本産食品を中国へ」
- 中国report 「歴史建築物から今を見る」
- 浙江省の名酒を巡る旅 ～米酒～
- History trip 「松本亀次郎の教え子 ～秋瑾～」

花 曆 蝟梅 冬の杭州に彩を添える風物詩

蝟梅（ロウバイ）は、中国各地で広く自生、栽培されている観賞用花木です。旧暦の12月を意味する「臘月」の頃に開花することや、植物学的に見れば、蝟梅は梅と同じ科や属ではありませんが、香りが似ていること、色が蜜蠍に似ていることからこの名前が名付けられ、別名「寒梅」とも呼ばれています。

杭州では、蝟梅の開花期は12月中旬～下旬から翌年2月まで続き、鮮やかな黄色が大地にほんのりとした温もりがあり、その香りは春の足音を感じさせてくれます。蝟梅の花が散り始める頃、春の訪れを本格的に告げる梅の花が咲き始めます。唐代の詩人・李商隱は、「知訪寒梅過野塘」という詩句を残しています。明治時代の文豪・芥川龍之介も「蝟梅や 雪うち透す 枝のだけ」と詠んでいます。

【特集】静岡県・浙江省友好提携締結40周年記念事業

「友好提携40周年記念式典」開催

～新しい時代の友好交流と協力関係の深化～

11月22日、静岡県・浙江省友好提携40周年の記念式典が双方のトップが出席してオンラインで開催され、静岡県会場には県幹部や交流団体、経済団体関係者など約70人、浙江省会場には約80人が出席しました。

記念式典において、今なお新型コロナの影響で中断している人的往来の早期再開や、新しい時代に合った交流の深化を目的に、川勝知事と王浩省長が6分野での交流強化が明記された共同宣言に調印しました。

双方は今後、経済分野では、デジタル経済や先端農業の交流促進、カーボンニュートラルに向けて協力を進め、また医療・健康分野では協力して人材を育成して、医療のスマート化を図り、文化・観光、青少年、民間での交流、県議会と省人民代表大会の間で相互訪問団派遣も進めることを確認しました。



高齢者介護交流プラットフォーム構築へ

～「静岡県・浙江省高齢者介護福祉交流に関する意向書」締結～



静岡県と浙江省は、高齢者介護福祉分野の交流をより一層推進するため、共同で「静岡県・浙江省高齢者介護交流プラットフォーム」を構築することになりました。11月22日、静岡県・浙江省経済交流促進機構静岡県委員会、インフィック株式会社、社会福祉法人駿府葵会、静岡県・浙江

省経済交流促進機構浙江省委員会、物産中大金石集團有限公司、杭州広宇安諾實業集團股有限公司の代表が「静岡県・浙江省高齢者介護福祉交流に関する意向書」について合意し、締結されました。これにより今後、双方の高齢者介護施設・企業及び大学をはじめとする幅広い関係機関と連携し、研修講座・交流会・情報交換会などの開催を通じ、両省県間の交流促進を図っていきます。

「唐詩の道 中日芸術家作品特別展～青山行不尽3～」

～伝統と現在が融合、仮想空間“AR”で、未来へ誘う～

日中の芸術家約70人による特別展覧会「唐詩の道 中日芸術家作品特別展～青山行不尽3～」が、浙江省展覧館とオンライン上で開催されました。これは、伝統と現代が融合した展覧会で、中国絵画や書画など伝統的な形式の作品だけではなく、ビデオ、インスタレーション、ニューメディアなど現代芸術のほとんどの形式を網羅し、また、日本から送られたデータをもとに中国で復元した書画・絵画なども会場に展示されました。また、オンライン上の展覧会では、唐詩の道の遺産とデジタル技術を組み合わせた、仮想空間上（AR）で鑑賞できる日中共同制作の作品も展示され、新たな試みとして注目されました。



【開幕式】



【展示会場】

「静岡県・浙江省ビジネス交流会」

～両県省におけるビジネス展開事例を紹介～

11月30日、「静岡県・浙江省ビジネス交流会」が静岡会場と杭州会場をオンラインで繋ぎ、オフラインを合わせたハイブリッド形式・同時通訳で開催されました。交流会では、杭州雅馬哈楽器有限公司に浙江省でのビジネス展開（進出）、浙江金海高科有限公司には日本（静岡県）でのビジネス展開をテーマにお話いただき、また株式会社ドリブルジャパンには浙江省でのビジネス展開（貿易取引）、阿里巴巴集団には越境電子商取引プラットフォーム「天猫国際」の輸入貿易におけるブランド優位性と市場開拓貿易取引をテーマに貿易協力の成果を紹介してもらい、次の時代へのビジネス展開模索の機会となりました。



【静岡会場】



【杭州会場】



スポーツ・芸術交流事業などの交流を行い、友好を深めてきました。

浙江省の省都・杭州と寧波との中間に位置する紹興市は、人口約527万人、陸域総面積は約8279km²、気候は温暖で、湖沼が多く、水路が縦横に走り、「東方のベニス」と称されている名高い水郷都市です。紹興酒の産地として、また文豪・魯迅の故郷として知られています。

富士宮市の企業から紹興市の工場に技術指導者が派遣されたことが友好都市を結ぶ出発点となり、また、両市とも酒造りが盛んなことが友好都市を結ぶ縁となりました。

友好を深化する「共同宣言」に署名

両市は、今年、友好都市提携25周年を迎え、11月11日にオンラインで記念式典が行われました。記念式典には、富士宮市側16人、紹興市側19人が参加し、両市の交流の歴史や両市の紹介動画の放映、「新時代を迎える日本・静岡県富士宮市と中国・浙江省紹興市との友好交流と協力の深化に関する共同宣言」調印式などが行われました。

記念事業として、11月7日、富士宮市側では、田貫湖の北サイトで25周年記念植樹が実施され、その時の様子が記念式典で動画放映されました。一方、紹興市側では、書道家が現場で25周年記念の揮毫を行い、両市は日中往来が難しいコロナ禍であっても、友好交流活動を続け、今後より強固な日中関係を構築していくことを祈念しました。



【友好都市提携25周年の記念植樹】



交流の歩み、25年

富士宮市と紹興市は、1997年11月11日に友好交流関係都市提携の調印を行い、今年で友好都市提携25周年を迎えました。両市は、この間、市民訪問団派遣事業、中学生国際交流研修事業、



【オンラインで記念式典を開催】

日本産食品を中国へ

～コロナ禍で、3回目の第5回中国国際輸入博～

11月5日(土)～10日(木)、第5回中国国際輸入博覽会が上海市の虹桥商務区の国家会展中心で開催されました。127の国と地域から約2,800の企業が参加し、来場者数は約46万人でした。



静岡県中国駐在員事務所長

浅原敏治

中国国際輸入博、県産品並ぶ

コロナ禍、今回も厳格な防疫措置が行われていました。海外からの入場者には、入国後10日間のホテルでの隔離生活し、全ての入場者には、3日間で2回のPCR検査、公共の場やイベント参加への自粛、指定防護マスク(N95、KN95)の着用が求められました。飲食エリアには、いつだれがどこで何を食べたかが分かるQRコードが設けられていました。今回も生鮮食品の小売、調理、試食は不可となっていました。

ジェトロの食品展示ブースに静岡県産の日本酒、天然酵母飲料、乾麺などを出展した日工(株)の青木雅一さんにお話を伺ったところ、バイヤーの数は昨年よりも少なかったが、新しい日本の食品を探す熱心なバイヤーが多かったそうです。



【静岡県産ウイスキー「富士」】

注目される人気の日本産ウイスキー

このほか、麒麟麦酒(株)ブースには、御殿場市のキリンディスティラリー富士御殿場蒸溜所で製造されたウイスキー「富士」が展示されていました。会場のスタッフによれば、2023年3月から中国に輸出を始めるそうです。同蒸溜所では工場見学も行っていて、日中間の渡航が再開されたら、中国から多くのお客様が訪れる事でしょう。中国でのウイスキーの人気はうなぎ上りで、当事務所にも中国の商社から静岡県産のウイスキーを紹介してほしいとの声を多く頂いています。

展示会を利用した出展・PRが重要

来場者数は昨年よりも少なかったものの、厳しいコロナ施策の中でも強い関心を持って来場される方々へのPRは、とても重要なことだと思います。中国政府主導で開催される、中国国内では最大のイベントであり、格式が最も高いと言われています。来年こそは、是非日本の皆様が自ら渡航して優れた日本の商品を紹介し、中国国内を始め、世界に向けて販路を広げていただきたいと思いました。



【日工(株)展示とボランティアの説明員】

歴史的建築物から 寧波の今を見る

月湖と天一閣

静岡県立大学グローバル地域センター特任准教授

寧波大学外国語学院外籍教師

静岡県日中友好協議会交流推進員

横井香織



寧波の中心部、天一広場の西側に月湖という名の湖があります。その月湖の西岸に位置するのが天一閣です。天一閣は、中国で現存する最も古い蔵書楼で、寧波を訪れた人を案内するとき、欠かせない場所です。ここに保存された大量の文献は、歴史の空白を補うために大きな貢献をしました。今回は、寧波の文化的な観光スポットである月湖と天一閣の歴史を紹介します。

月湖は、唐代に開拓され、636年に完成した湖です。南宋紹興年間に、月湖の周りに四季折々の花や樹木が植えられ、「月湖十洲」(景勝地)が造されました。また、宋元代以降、明州(寧波)が輩出した文人や学者など知識人の多くが月湖周辺に集まり、「浙東学术センター」と呼ばれるようになりました。その後も、高麗使行館(迎賓館)や、銀台第(官僚の邸宅)が建設され、現在はそれぞれ博物館になっています。

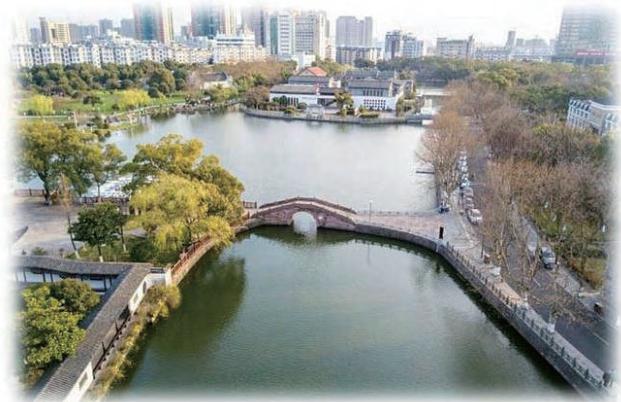
天一閣は、月湖の西岸にあり、1561年から1566年に明朝兵部の官僚だった範欽が私有の書庫として建てたものです。範欽は読書家で、地方志や行政書、科挙の記録、詩文集などを所蔵していました。範欽が最初に建てた蔵書楼を、「東明草堂」といいます。やがて退官すると彼の蔵書は増え続けて7万余巻となり、新しい蔵書楼を建てる必要性が生まれました。範欽は、『易經』の「天生一水…地六承之」の部分の意味(水を借りて防火し書物を保つ)から、「天一閣」と名づけました。命名した通り、蔵書楼の隣に防火のための池を設置しました。

範欽の死後、天一閣と7万余巻の蔵書は長男の範大冲が、「蔵書は天一閣から出さない」という父の教えとともに受け継ぎました。さらに曾孫範光文が、建物を修復し、花や樹木を植えて楼閣を整備しました。しかし、アヘン戦争や太平天国の乱、日中戦争など戦乱のたびに蔵書が略奪され、売りに出されました。1939年には、蔵書はわずか9,000巻になりました。戦争終結後、天一閣の蔵書は徐々に取り戻されました。1982年になると、蔵書は30万巻となり、蔵書の保護と古籍の修復が行われるようになりました。

現在の月湖公園は、寧波人にとって休日に家族でのんびり過ごす憩いの場です。私も、寧波で暮らしていたころ、公園内の金木犀の香る小道を歩いたり、黄色に輝くイチョウの林を見にいったりしました。月湖公園や天一閣は、他の公園と違い、その風景の中に寧波の歴史の重みや文化の香りを感じられる特別な場所のように思いました。



【天一閣正門】



【月湖公園】

浙江省の名酒を巡る旅 米酒

醸造酒の一つである米酒は、もち米を原料に醸造した甘い酒を指します。蒸米、保温、発酵、蒸留、貯蔵とシンプルな工程ですが、これらの工程の背後には、酒造りの杜氏の経験と技術が必要不可欠です。浙江省では、寧波の白糯米酒が知られています。

冬に醸造されるもち米酒

冬に醸造されるもち米酒は、より一層芳醇で濃厚に仕上がり、より好まれます。江南地方には、冬至の日に一杯の米酒を飲むと、来年はより甘い日が訪れるという地元のことわざがあります。特に寧波の人々にとっては、旧正月（春節）のお祝いに、この米酒は欠かせないと言わしめるほどであり、各地で自家醸造の米酒を飲む伝統的な風習があります。

中国の米酒文化の長い歴史の中で、寧波米酒は輝かしい歴史を持っています。歴史的記述によると、約5,000年前、余姚の河姆渡人は飲酒活動があり、唐の時代より明州米酒（寧波米酒）は宮廷献上酒になりました。しかし、1970年代以降、国内の醸造会社がスピードと生産を追求するにつれ、伝統的な白麹発酵を小麦麹と根粒菌に置き換え、野外発酵を鉄樽と大型タンクに置き換え、現代の紹興酒を模倣し、徐々に「昔の味」を失っていきました。衣食住が豊かになると、農民は余った穀物を使って米酒を作るようになり、幸福な生活と豊作を象徴する冬至に米酒を作る習慣が次第に再び盛んになりました。



寧波美食に欠かせない「白糯米酒」

寧波の白糯米酒は、原材料に水・もち米・小麦を使い、寧波天河生態風景区の水源の水が良しとされ、アルコール度数10.5%程度の仕上がりになります。白糯米酒は、味付けが濃い寧波料理にもよく合います。また、料理の調味料として使われることもあります。

白糯米酒には、健脾開胃、舒筋活血、除湿消痰、補血養顏、延年益寿の機能があり、中高年者や虚弱者に適し、もち米の成分が漢方薬として甘性温、脾臟・腎・肺に入り、温胃健脾、益氣止瀉、生津止汗を促して補益機能を強化するだけでなく、活血通絡の作用もあると言われています。



松本亀次郎の教え子

秋瑾



【日本留学時代の秋瑾】

清国政府は国民教育の手段として、万を超える清国留学生を日本へ派遣し、日本政府も国策として、留学生や中国の学校教育をバックアップしていました。しかし、清国政府の思惑とは逆に、啓蒙によって自国の惨状に目覚めた留学生の多くは、体制打倒の革命に走りました。清末の女性革命家・秋瑾（しゅうきん/1875年～1907年）も日本へ留学したその一人です。

秋瑾の原籍は、浙江省紹興府山陰県ですが、彼女の祖父・秋嘉禾が廈門府の長官として赴任し、これに一族が同行したため、福建省の廈門で生まれました。当時の廈門は、イギリスが強制的に開かせた港です。府長官である祖父は、絶えずイギリス人に侮辱され、その怒りが幼少の秋瑾にも伝わっていたと言われています。名家で育った秋瑾は、子どもの時は纏足をさせられていきましたが、革命思想に目覚めると纏足を恥じるようになり、代わりに武芸に励み、刀剣（特に日本刀）を愛好していました。母親は、教養豊かな女性で、秋瑾は11歳で詩を詠むことを覚え、杜甫・辛稼軒の詩詞集を手放さなかったといいます。その傍ら、乗馬や撃劍・走り幅跳び・走り高跳びなどで体を鍛えていました。

1895年、親が決めた湖南省の豪商の長男・王廷鈞と結婚し、北京に住み子供もできましたが、酒浸りの夫に愛想を尽かし、やがて日本留学を志すようになります。多くの知識青年が、国内での弾圧を避けるとともに、外国文化を吸収する窓口として、先進国である日本に留学し、横の連絡を取り合ってそれぞれの立場に応じた革命結社を結成していました。

人一倍知性と気骨に恵まれた秋瑾は、この祖国の危機を開拓する運動に挺身する必要があると考えていました。日本の女子教育が、中国より進んでいることなどを聞いたりしたことが、彼女の留学熱に拍車をかけ、1904年家族を置いてついに日本へ留学し、松本亀次郎がいる弘文学院に編入しました。後に反清革命運動に身を投じるようになり、孫文が率いる革命団体「中国同盟会」に参加したり、また女性だけの「共愛会」も創設したりしています。当時の秋瑾は、清服を嫌って、和服を着用し、好んで短刀を身につけていました。その後、実践女学校（現実践女子大学）に入学し、教育・工芸・看護学なども学び、麹町神楽坂の武術会にも通い、射撃を練習し、爆薬の製法まで学んでいました。しかし、中国革命運動に対する取締りが強化され、1905年日本政府が出た、「清国留学生取締規則」に憤慨して留学を打ち切り、同年12月に帰国しました。1907年、徐錫麟が紹興で作った体育専門学校「大通師範学堂」の後任の責任者となり、革命運動に参加し、当局に目をつけられるようになり、蜂起計画を察知されて逮捕され、翌日、紹興軒亭口の刑死場で斬首、処刑されました。31才の若さでした。その後、秋瑾の死は、新中国黎明期の革命運動の精神的支柱となりました。



【松本亀次郎】